

天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日（↑）

「天草・島原の乱 徳川幕府を震撼させた百二十日」が二十五日から、八代市西松江城町の市立博物館未来の森ミュージアムで始まる。十一月二十四日まで。乱に関わる絵画・武器武具・絵図・古文書など、重要文化財十点を含む百十二点を展示する。

寛永十四年（一六三七）十月、島原と天草で起こった一揆は、二万人を越える勢力となつて、島原城、富岡城を攻撃しました。この大乱の大将だったとされるのが、天草四郎です。四郎は天草大矢野の出身で、その父益田甚兵衛は小西家の浪人だったといいます。原城（長崎県南高来郡南有馬町）に集結した一揆勢は、三ヶ月にも及ぶ籠城戦を戦いました。十万の幕府軍に包囲されながらも度々その攻撃を退けますが、ついに一月二十八日落城し、多くの人々が命を失いました。

この旗は、原城の戦いで、天草四郎が使用した陣中旗であると伝えられています。上部に記されたポルトガル語は、「いつも神聖な秘蹟は讃えられん」という意味です。中央に描かれた聖杯と十字架のある聖餅を左右から天使が手を合わせて持んでいます。

佐賀藩主鍋島氏の家臣鍋島大膳が、原城に乗り入れた時に手に入れたものだといいます。乱を平定した側の戦功を伝えるために残されたものですが、一揆側の貴重な遺品でもあります。

（林千寿・八代市立博物館学芸員）

主催 八代市立博物館未来の森ミュージアム、熊本日日新聞社 入館料一般

600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。



天草四郎陣中旗

あまくさしろうじんちゅうき

寛永 14 年(1637)頃力

タテ 108.6 セン ヨコ 108.6 セン

熊本県・本渡市立天草切支丹館所蔵
国指定重要文化財

天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日(3)

思わぬ大一揆へと発展した天草・島原の乱は、幕府を大いに困惑させます。原城に籠城した一揆勢に対し、幕府軍は連敗を喫しますが、最後に乱を平定したのは九州大名の軍事力でした。

寛永十五年(一六三八)一月、鍋島(佐賀)、細川(熊本)、黒田(福岡)ら九州の大名軍が原城に結集します。総大将の松平信綱は、先の攻撃失敗を教訓とし、慎重に城乗りの準備を進めました。そして二月二十七日総攻撃を行い、圧倒的軍事力を以って原城を落城させたのです。

この絵図は、柳川藩主立花家に伝世したもので、富岡城戦から原城陥落に至るまで、乱の経過が分かるようになっています。とりわけ総攻撃前の幕府軍の仕寄と陣所の描写が詳細で、この絵図から諸大名軍の配置を知ることができます。細川軍は、絵図左側の三の丸方面に陣所を構え、立花軍とともに三の丸から原城に乗り入れました。

(林千寿・八代市立博物館学芸員)

「天草・島原の乱」は八代市立博物館未来の森ミュージアムで二十五日から十一月二十四日まで。入館料一般600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。

島原御陣図

しまばらごじんず

江戸時代中期

タテ 178.8 セン ヨコ 204.6 セン

福岡県柳川市・福岡県立伝習館高校同窓会所蔵



天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日(4)

平和の世にあつても、大名は戦争に備える義務がありました。与えられた領地に対して、軍事上の負担が定められていて、幕府のために相応の働きをすることが求められたのです。

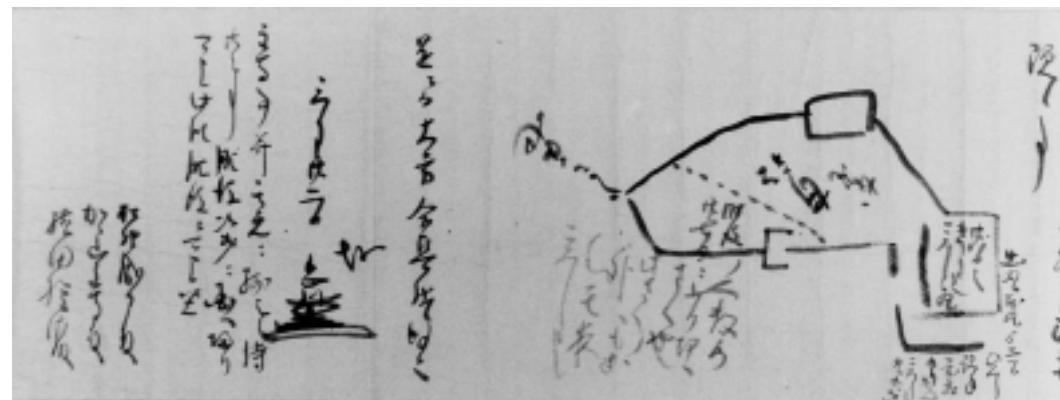
天草・島原の乱における肥後細川家の戦いぶりは、まさに隙のないものでした。原城総攻撃では、本丸一番乗りを果たし、天草四郎の首を討ち取っています。自ら兵を率いて戦陣に立つた藩主忠利は、輝かしい戦果に満足したことでしょう。ところが、江戸では、細川家をねたみ、本丸一番乗りを疑うような噂が流れています。江戸にいた忠利の父三斎は、誤解を招くような忠利の手柄話しを諫めます。これに対し忠利は、本丸一番乗りが間違いないことを主張し、江戸に向けて本状を送りました。本丸乗りの様子を説明するため添えられた絵図には、夜営で築いた柵の場所まで記入されています。父三斎の態度に不満を感じ、戦功を必死に証明しようとする忠利の姿が伺われます。

(林千寿・八代市立博物館学芸員)

「天草・島原の乱」は八代市立博物館未来の森ミュージアムで二十五日から十一月二十四日まで。入館料一般600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。

細川忠利自筆絵図入書状
ほそかわただとしげひつえずいりしょじょう

松野織部外2名宛
寛永15年(1638)3月22日
タテ 18.2セン
熊本県・本渡市立天草切支丹館所蔵



天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日(5)

天草・島原の乱は、久々に訪れた戦陣であり、武士にとつては、武功をあげる好機でした。このため、戦後に行われた戦いの評価は、重要な意味を持ったのです。

島原の乱後、肥後細川藩では、武功の調査を行い、働きに応じて褒賞を与えました。本丸一番乗りを果たした益田弥一右衛門と、天草四郎の首を取った陣佐左衛門が最も高く評価され、千石が増加されました。

細川家中と同様に、家老松井家でも武功の査定が行われました。この書付は、原城の戦いにおける松井家臣の戦功を記したもので、上々、上、中の上、中と評価付けがされています。名前の下にはそれぞれの働き振りが記されていて、鉄砲隊を効果的に指揮した鉄砲頭クラスの家臣が高い評価を受けていることがわかります。たとえ鎧で敵を倒しても、鉄砲隊の指揮振りが悪ければ、評価が下がつているのです。討ち取った首の数が判断材料とされていないところに、組織行動を優先させようとする軍隊の変容を見ることができます。

(林千寿・八代市立博物館学芸員)

有馬陣戦功の者書付
ありまのじんせんこうのものかきつけ

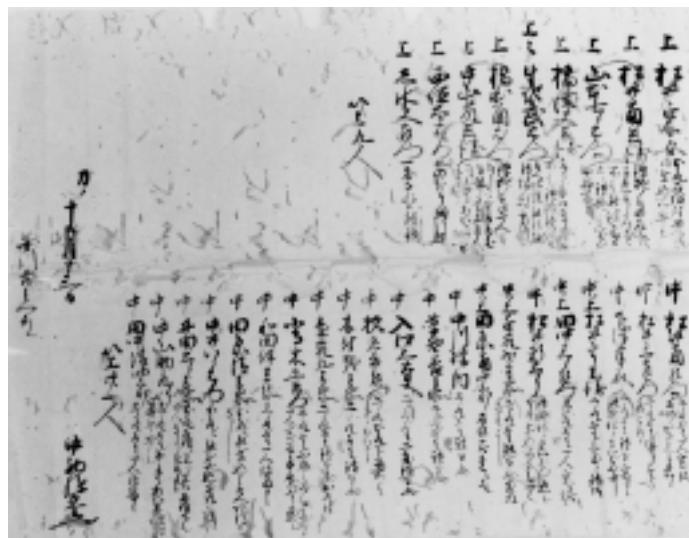
西川吉兵へ宛

寛永15年(1638)10月13日

タテ 32.4セン ヨコ 42.5セン

熊本県八代市・(財)松井文庫所蔵

「天草・島原の乱」は八代市立博物館未来の森ミュージアムで二十五日から十一月二十四日まで。入館料一般600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。



天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日(6)

原城総攻撃の日、細川光尚を後押ししたのは、「さあ、御乗り込みください」という沢村大学の声でした。光尚は肥後細川藩主忠利の嫡男で十八歳、初めての戦場でした。

大坂夏の陣（一六一五年）以来、二十年以上戦争が絶えました。寛永十四年（一六三七）に天草・島原の乱が起こった時、戦場経験者は貴重な存在となっていました。肥後細川藩では、経験豊富な老臣の当用に重きを置き、松井興長（五十六歳）と沢村大学（七十八歳）に出陣を命じています。大学は、天正十年（一五八二）に足軽として細川家に召抱えられ、数々の戦場で手柄を立て重臣となりました。若き次期藩主光尚に附属させられた大学は、光尚のそば近く仕え、戦陣の駆け引きを教えたのです。

本画像には、鎧、兜、槍、薙刀、指物（旗）など、戦いの道具を身に付けた沢村大学の姿が描かれています。島原の乱にもこのような姿で出陣したのではないでしょうか。また、大学が腰掛けている竹束は、弾除けの役割を果たすもので、戦場の必需品でした。

大学の生存中に描かれており、上部に記された自筆の贊には、子孫を励ますためこれを記し、武士の道たる形を現し置くと書かれています。まさに戦場に生きる武士のあり方を表現した画像です。

（林千寿・八代市立博物館学芸員）

「天草・島原の乱」は八代市立博物館未

来の森ミュージアムで二十五日から十一月二十四日まで。入館料一般600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。



沢村大学画像

さわむらだいがくがぞう

正保2年(1645)

タテ 116.3セン ヨコ 58.4セン

熊本市・成道寺所蔵

天草・島原の乱

徳川幕府を震撼させた百二十日（2）

キリスト教を禁止した徳川幕府は、さまざまな方法を使って、キリストンを探し出し、弾圧しました。踏絵は、隠れキリストンをあばくために行われ、人々はキリストや聖母マリアの像を足で踏むことを強要されました。拷問を恐れて、転んだ宗徒も多かったといいます。その精神的苦しみは如何ばかりだったでしょう。このような幕府のキリストン政策が、天草・島原の乱の原因の一つとなりました。

寛永年間に長崎で開始された踏絵は、九州諸藩にも広がり、肥後細川藩では、長崎から踏絵を借り受け、踏絵を行うようになりました。当初は不審な者に対する行為でしたが、寛文年間になると藩内全領民を対象に実施されるようになりました。

踏絵には、銅牌を板にはめこんだ板踏絵、寛文九年（一六六九）長崎奉行所の命令で作られた真鍮踏絵があります。現在、東京国立博物館には長崎奉行所旧蔵の踏絵二十九枚が所蔵されています。本品はその内の一枚で、十字架にかけられたキリストの姿が表されています。摩滅した表面からは、たくさんの人々に踏まれた跡の生々しさが感じられます。

（林千寿・八代市立博物館学芸員）

「天草・島原の乱」は八代市立博物館未来の森ミュージアムで二十五日から十一月二十四日まで。入館料一般600円、大学・高校400円、中学・小学200円。20人以上の団体は2割引。問い合わせは同館 0965(34)5555。

真鍮踏絵 キリスト像（十字架上のキリスト）
しんちゅうふみえ

17世紀 日本製

タテ 18.8 厘メートル ヨコ 13.8 厘メートル 厚 2.3 厘メートル

東京国立博物館所蔵

国指定重要文化財

